

広汎性発達障害児のきょうだいが捉える家族の関わりのあり方

—母親との関係の変化に焦点を当てて—

GH091008 : 古 蘭 祥 子

指導教員 : 吉田ゆり教授

問題

障害児と暮らしている家庭環境の中では、家族がその影響を様々な形で受けていることが考えられる。家族が受ける影響として、身体的な疲労や障害受容等による心理的負担、家族メンバー間の役割葛藤などが例としてあげられる。このような家族が受ける影響の1つとして中田（2009）は、発達障害児のきょうだいに着目し、「中でもきょうだいは、自分自身の精神発達の過程できょうだいの障害を理解し、また、きょうだいに障害があるために生じる困難性を受け入れていかなければならない」と述べている。

例えば、広汎性発達障害児と暮らす家庭環境の中で、母親が同胞の世話で追われて、日常的に余裕のない生活を送っている姿は、きょうだいにとっては「いい子」であることを期待される非言語的メッセージとなっている（宮里・川上・永田・田中、2002）とされている。これについて庄司・林田（2001）はこの「いい子」であることを、「周囲の期待に応えようとするあまり過度に自分の欲求を抑えたり、欲求や意欲を失ったりすることが予測される」と考えている。

これらの先行研究から、家庭内において家族との関わりを持つ中で自身の家族のあり方を、きょうだい児自身がどのように捉えているのか、またその中でも母親との関わりの変化をどのように捉えているのかによって、きょうだいの自尊心のあり方や、母親との関係にも違いが見られるのではないだろうか。

したがって、本研究では広汎性発達障害児のきょうだいが、障害のある同胞と暮らす家庭における、家族との関わりに着目した際、自身の家族関係をどのように捉えているのか、また中でも母親との関係の変化をどのように捉えているのかを明らかにすることを目的とする。そして、障害児のきょうだい自身のその人らしさが尊重されるためにも、きょうだいに対する心理臨床的支援へつなげる手がかりとする。

リサーチ・クエスチョン 本研究におけるリサーチ・クエスチョンとして以下のものがある。

- ・抑えている感情を出せる場所（存在）があったかどうかによって、母親との関わりに違いがあるのではないか。（母親や、同胞以外のきょうだいなど）
- ・家庭内における母親との関係について、同胞の障害について知ることによって、母親ときょうだいがより近い関係へと変化を遂げるようになるのではないか。
- ・面接を行う中で、語りの内容が変化するなどのカタルシス効果が得られるのではないか。

方法

- 1) **調査期間** 2010年7月～11月。
- 2) **調査方法** 半構造化面接を実施。面接時間としては、研究協力者それぞれ1時間～1時間30分の間で2度ずつの面接（Cさんのみ時間の都合上、3回実施）が行われた。
- 3) **調査場所** 面接を行う場所として、防音設備の整ったプライバシー保護が可能な場所で行うこととし、研究協力者と事前に打ち合わせを行い、全て本学心理臨床相談センター内相談室にて実施した。
- 4) **調査対象者** 調査対象者は、高校生以上の広汎性発達障害児のきょうだい児を対象とした。調査協力者を募り、5名の協力者を得た。その内3名はX大学の心理学や特別支援を中心に専攻する学科に在籍しており、授業やボランティア等の学外実習をとおして発達障害について学んでいた。したがって、発達障害についての知識があることと、面接を行うに当たってネガティブな内容の語りが見られる事も考えられたため、面接後のフォローアップまで考慮し、X大学学生である3名を採用し、分析対象とした。
- 5) **分析方法** 佐藤（2008）の質的データ分析法を用いた。質的データ分析を用いて、逐語文字化したデータから概念的カテゴリーを抽出し、抽出

されたカテゴリーを縦軸、事例A・B・Cを横軸においたコード・マトリックスを作成した。さらに、再度逐語文字化したデータに戻り、抽出されたカテゴリーに沿ったエピソードを抽出した。

結果・考察

結果として、3名の語りの中から、12のカテゴリー（「同胞の捉え方」、「同胞の障害からの影響」、「感情の抑圧」、「話が出来る場所（相談・友人への同胞紹介・きょうだい会の意味）」、「母親との関わり」、「母親に対する思い（ポジティブ・ネガティブ）」、「家庭内役割（共同支援者的役割・使命感）」、「きょうだい児が捉える自身に対する母親の思い」、「母親との考えのズレ」、「障害受容」、「家族の関わりの変化」、「母親からの障害説明」）を抽出した。

本研究では、きょうだいが余裕のない母親の様子を目にしている事によって自身の感情を抑えることや、自分がしっかりしなければならない、自分も親のように同胞を支えて行かなければならないというような思いを抱えていると考えられることから、きょうだいが見える家族の関わりの方から、きょうだいと母親との関わりの変化に焦点を当てて検討を行った。

3事例を通して、共通して見出された点の1つとして“母親との考えのズレ”という点が見出された。この両者の考えの違いという点では、各事例において母親の望むものときょうだい児が望んでいるものの違いから、両者の間に考えのズレが生じていることが考えられる。面接内における語りの中から、様々なエピソードにおいて、きょうだい児であるA・B・Cさん3名から、母親に対して、“もっとこちらのことも見て欲しい”、“もっと私の事も考えて欲しい”というような思いがあったことが想定された。それに対して、母親側の思いとして“きょうだいには分かってほしい”、“この子は自分の味方”というような思いがきょうだい児である3名の語りの中から考えられた。この母親の思いがきょうだい児から語られた点を考えても、きょうだい児は母親から“味方になってほしい”という思いや、“一緒にサポートをしてほしい”というような共同支援者的関わりを求めるような思いをどこかで感じ取っていたことが考えられる。それらのことを感じとりながらも、母親との関わりにおいて、自身が求めるものと母

親から求められるきょうだい児像の受け入れ辛さという点から、考えのズレが生じ、きょうだい児にとって苦痛を伴うものとして捉えられていた可能性がある。

次に、共通していた点として“障害について知る機会”についての語りがあった。本研究における“きょうだい会”や“大学における発達障害の授業の受講”といった“障害について知る機会”があることによって、障害特性の学習であったり、同じような環境で生活している他のきょうだい児との関わりや情報収集が可能となる。これらの情報収集の場を経験することによって、母親との関わりにも変化がみられることが見出された。

きょうだい児が“障害について知る”事によって、家庭内における母親との関わりにおいて、母親に認めてもらう経験を得ることが想定され、その母親から認められるという経験を通して家庭内における自身の存在意義を見出し、母親との関わりにおいては共同支援者的関わりが強化されることが考えられた。

本研究の臨床的意義

発達障害児と共に暮らす家族という点で考えた際に、その影響を受ける対象の1つとして、共に成長するきょうだい児の存在が考えられる。きょうだい児は日々同胞のサポートをする母親を目にしながら、自身の思いを抑圧し、“いい子”でいなければならないというような思いを抱えながら、同胞と暮らす家庭内において成長をする。また、母親ときょうだい児という面で先行研究を見ると、きょうだい児が捉える母親への思いに焦点を当てた研究はあまり見られない。本研究では、このような特殊な家庭環境の中で育つ同胞と共に成長するきょうだいに焦点を当てていると言う点に加えて、きょうだい児と母親の関わりの変化という点に焦点を当てていることにおいても臨床的意義があることが考えられる。

さらに、どこかきょうだい児自身が“自分”というものを出せないまま成長していることが考えられる。この点について本研究では、家族間の関わりに対するきょうだい児自身による捉え方をきょうだいの言葉で語っていただいた事によって、きょうだいが見える家庭内における“自分”という存在についての一端を見ることが出来たように思う。